

ハインリヒ・フォン・クライストと ジャン・ジャック・ルソー^① (1)

横 谷 文 孝

S. 635^②

ハインリヒ・フォン・クライストが婚約者ヴィルヘルミーネ・フォン・ツェンゲにカント哲学との出会いで衝撃を受けた旨を伝え、「私の唯一の、私の最高の目標が沈んでしまった。私は今やいかなる目標もない^③」と嘆いているのと同じ手紙の数行前には次のような箇所がある。

「ルソーに対する君の傾倒より高い段階へ君を直ちに導けるような状況は容易には起こり得なかったことだろう。君の手紙全体には既にルソーの精神のようなものが見い出される——私は君に、今日から数えて二つ目の贈り物をするつもりだが、それはルソー全集になるだろう。その時には君にルソーを読む順序も示すつもりだ——今のところは集中してエミールを完全に読み終えるようにしたまえ^④。」

この助言から推察できるのは、クライストが既に、学問による教養が可能だという彼の信念が動揺しているこの時点に、ルソーの見解の中に新しい視点を発見していたことである。ルソーの見解はクライストはとっくに承知しているが、今は彼にとって新しい意味を獲得しているのである。ルソーに対するこの信条告白は、何度も更新され、

S. 636

スイスで農夫として定住するという計画や³⁾、ギスカルー破局の後マインツで指物師の仕事を習い覚えようという意図の通り⁴⁾、実際行動によって証明され、専門文献においてはずっと以前から知られているのだが、ハインリヒ・フォン・クライストの作品に対する結果という点ではほとんど全く顧慮されなかったのである。オスカル・リター・フォン・クシリンダー⁵⁾による広範な研究は、溢れるほど資料を収集しているにも拘わらず、合理主義と非合理主義との実りのない対立に嵌まり込んでおり、諸々の手紙を諸作品よりも詳細にそしてより大きな比重で考察しており、本来の分析を断念している。H. A. コルフは、『ゲーテ時代の精神』における彼の広範なクライスト章の中でルソーの名を全く挙げていないし、ベンノー・フォン・ヴィーゼは『レッシングからヘッベルまでのドイツ悲劇』の中でルソーを全く欄外で言及し、そこから何らかの結論を引き出そうとはしていない。他の最近の論述もクライストの作品におけるルソーの影響を必要な比重で追跡してはいない⁶⁾。ゲオルク・ルカーチは彼の生憎効果的になり過ぎただけのクライスト論の中で、この影響をかなり制限し限定して見ている。彼は「旧プロイセンのユンカー」クライストの「迷い」に関連させながら、次のように書いているのである。

S. 637

「クライストがその際先ず第一に啓蒙主義と対決しなければならないのは当然である。彼の発展にとって決定的なのはこの場合ルソーの影響である。そしてまたしてもクライストの〈近代性〉にとって非常に特徴的なのは、彼が、ルソーの文化批評を市民社会の明白な反動的否定に転化させる（いずれにせよドイツにおいて）最初の人たちの一人であることだ⁷⁾。」

どうしてこのような見解に至るのか？どの程度までルカーチの主張は当たっているのか？クライストの発展にとってそして彼流の受容にとって1801年

のパリ滞在は殊に重要である。クライストは、学問の理想挫折後、彼の内に残留していた空虚から気散じされ気分転換されるために、旅を企てていた。彼は幻想を抱いてパリへ旅しているのではない⁸⁾。彼はパリで自由の世界、光輝の世界そして進歩の世界を見つけようと期待しているのではない。二、三の非常に小さな例外を除けば、このような態度は、ルイ 16 世の死刑以来そしてジャコバン党の独裁以来ドイツには存在しない。しかしあらゆる陰鬱な期待を上回るものがある。彼が暗影部に対してのみ感情的にそして敏感になるのは深い落胆のためだろうか？

S. 638

彼には現在どのみち全世界に危険と破滅が迫っていると思われることに原因があるのか？——彼は旅行中に危うく死に繋がるような事故に遭っている——彼はパリで非常に兆候的な自然を認知しているのではないのか？彼にとって怪しからぬことは、何よりも先ず道德の腐敗であり人命の軽視である。彼の許嫁の妹ルイーゼ・フォン・ツェンゲに宛てて彼はパリから書いている。

「セーヌまたは通りで死体を見つけることも全く普通のことです。そういう時そのような死体はサン・ミッシェル橋のほとりの専用ドームに投げられます。そこにはいつもまる一山の死体が重なり合って横たわっています。親族達が、もし彼らの中からメンバーが欠ければ、ここへやって来て見つかるかも知れないからです。国民的祝祭ではいつでも平均 10 人の生命が犠牲になります。それはしばしば確実に予見されています。それだからといって不幸が予防される訳ではありません。7 月 14 日の平和祭の夜に鉄輪をつけた気球が上空に上がりました。それには花火が固定されていて、それが空中で焼けて、それから気球を燃え上がらせる予定でした。その見せ物は素敵でした。しかし、気球が焼失してしまった時には人々で埋め尽くされた野原に輪が落下することは予見できました。しかしここでは人命は物であり、その標

本が80万あるのです—— 気球が上がり、輪が落下し、それが一組の男女を撃ち殺しました。それだけのことでした⁹⁾。」

この報告はクライストの立場を特徴付けている。彼は、フランス啓蒙主義者の作品中に見出し自から受け入れていた市民的理想と甚だしく矛盾する現実と対決させられている。彼がルソーの作品類それ自体の中に極めて魅力的な要因として発見していた個体に対する尊敬の代わりに、この個体があらゆるその能力を發展させるかもしれないという懸念の代わりに、彼は、革命の防衛戦争やジャコバン党独裁のテロやナポレオンの間断なき侵略戦争が呼び起こしたような人命軽視を目の当たりに見た。彼は、偏に、階級社会が造出する歴史的発展の弁証法が持つこの非人間的側面を理解した。こうして彼はブルジョワジーの物質的支配の中に改善を確認できなかった。

S. 639

経済活動の發展は彼には興味がない。さらにここでも先ず利益が犠牲の背後に姿を消し、そしてまたしても利益は、2, 3のわずかなあくどい便乗者にとっての利益であることが判明するだけである。彼らは道徳的に少なくとも以前のアンシャンレジームの廷臣たちと同様に墮落しているのだ。クライストはモラルの領域で妥協する気がないので、彼はこの状況においてまさに、人間の尊厳を擁護したいという彼の人道的な願いから、明瞭な階級決定に至ることができない。こうして彼は完全に孤立した情況に追い込まれる。彼は、このような特徴の中でその間に歴史によって追い越され一部は訂正されてしまった市民的理念の土壌に立っている。彼は彼の階級から離れる。しかし彼は、フランスで知り合いになる市民的、資本主義的發展から、何よりも先ず非人間的な特徴に気付くので、彼はこの解決を完全には実行できないし、必ずしも市民側につくことができない¹⁰⁾。これが後に、国民的自由がボナパルトによって脅かされる時に、彼の立場を単純にするのだらう。他方、そのことはクラ

イストにとっていずれの見通しも完全に喪失することを意味する。なぜならブルジョアジーと歴史的に交代するであろうあの諸勢力はまだ熟していないからである。

こうしてクライストは、ルソーの下で見出す人文主義に自分が差し戻されていることに気付く。自己の振る舞いを言い繕う時に使われるスローガンや決まり文句へ彼の理念が品位を落とされているさまに彼は嫌悪を覚える。

「ルソーという言葉はいつもフランス人が二言目には口にする言葉である。そして、これが彼の作品であると言われたら、彼はどんなに恥じ入ることだろう¹¹⁾。」

ルソーが有名な

S. 640

二つのディスクールの中で道徳没落過程だと表現していた社会過程を、クライストは革命によって変化したとは見ずに、早められたと考えた。こうして彼は許婚に書いている。

「…あらゆる感覚が私にここで確証しています。とっくに私の感情が私に語ったことを、つまり、我々を学問はより良くもより幸福にもしないということです。そして、私をこのことが一つの決心に導いてくれるよう望みます。ああ、最高の学問の下でこの最高の不道徳を初めて見た時に、私がどんな印象を受けたかを私は君に述べることができません。運命はこの国民をどこへ連れて行くのだろうか？神のみぞ知るです。この国民はどこか他のヨーロッパ国民よりも没落しかかっています。時々、華やかな大広間の中にそして華やかな装丁でルソー、ヘルヴェティウス、ヴォルテールの作品が置かれている図書館を私が眺める時、私は思います、それらの作品はどんな役に立っ

たのか、と。たった一つでもその目的を果たしたのだろうか？それらの作品は車輪を止めることができたのだろうか？引切り無しに転げ落ちてその深淵に向かって突っ走る車輪を？ああ、優れた作品を書いたすべての人たちがこの善の半分でも成したなら、世界はもっとよくなるでしょうに¹²⁾。」

これによって、絶対主義社会に対するルソーの批判は、市民革命の後も社会に対する批判そのものとしてクライストによって維持されるだろう。彼は社会過程の原動力を見抜いていないので、今や資本主義の止め処無き発展と共に剥き出しに明らかになる階級社会の否定的、非人間的側面を抛り所とする。前革命の理念の紋切り型の使用と並んであからさまに現われる人間尊厳の軽視が、クライストがパリで知り合いになる革命の遺産に対する彼の拒否的な姿勢を決定する。ナポレオン・ボナパルトは彼にとってますます悪への、非人間的なものへのこの発展のシンボルに、代表者になる。

奇妙なのは、クライストが、このように行動を文筆よりも重視している頃と同じ時に、文筆さえ行っていることである。彼は多分この頃最初のドラマを構想しており、最終草稿ではその時『シュロップフェンシュタイン家』と呼ばれることになる。この悲劇への構想は明白なルソー的思想を基礎にしている。ロメオとユリアのテーマ——二つの家の愛すべき後継者たちが両家の憎悪が原因で没落する——は

S. 641

いろいろな点で変えられている。一方で葛藤の勃発は実際の殺害には全く基づいておらず、思い違いに、誤解に基づいている。このことをルカーチは一面的に苦心して明らかにしている。

「シェイクスピアの場合、問題なのは … 新しい、ヒューマニスティックな情熱、個人的な愛に対する権利と、仇討ちという中世的蛮行との間の悲劇

的葛藤である。クライストの場合の問題は、收拾のつかない連続した誤解から発生する〈運命性〉の形成である¹³⁾。」

このように対立させながら、ルカーチは全体の本来の動機と、本来の根拠付けを否定している。我々にこの場合伝えられていて『ティールレッツ家』に名義を書き換えられている最初の草稿では、前提をなす最初のポイントが、個々の幕の筋経過がスケッチされる前に、次のように述べられている。

「アロンツォ・フォン・ティールレッツとフェルナンド・フォン・ティールレッツの二人は従兄弟であり、二人の祖父たちは遺産契約をお互いに結んだ。二人は争いに没頭している。フェルナンドの（悪い）息子はアロンツォ家の男たちの近くで死んでいるのが発見され、殺害はアロンツォのせいとされる¹⁴⁾。」

これと共に事件全体の根底及び動機付けとして相続契約が持ち出される。作品の最終草案においても相続契約が2回指摘される。教会管理人は、イエロニモから、荒々しい復讐準備とは何を意味しているのか、何が起こったのかと問われる時、相続契約を口にし始める。

古い昔から我々二つの伯爵家、
フォン・ロシッツ家とフォン・ヴァルヴァント家の間には、
相続契約が存在するのです。
その契約のために、一方の家系の
完全な絶滅の後で、その全財産が
他の家系に帰することになるのです。

S. 642

イエロニモは彼を遮る。

本題に入ろう、老人よ、それは問題に関係ないのだから！

それに対して教会管理人は——そして彼と共に力をこめて詩人は——答える。

ああ、殿様、相続契約が問題なのです。

なぜならそれこそ仰る通り、リングは

墮罪の内には入らないからです。(177 ff.)

ヴァルヴァント家においても相続契約が言及され、そして、両家の間に形成された不信はその契約のせいとされる。この思想は第1 ディスクールにおけるルソーの文化批判と、そして第2 ディスクールにおける財産の特徴づけと結び付いている。そこには有名な命題が見い出される。

「地所に垣を巡らして、これは私のものだ、と言うことを思い付き、そして、とてもお人好しのあまりそれを信じてしまうような人々を見つけた最初の人、市民社会の真の創設者であった¹⁵⁾。」

その所有はしかし——ルソーによれば——道徳的に有害な影響を持つ。その所有は不平等を作り出すだけでなく、同時にあらゆる真の人間関係を損なう。権利と化した所有の発展に伴って、不平等が合法化され、ついには相互の人間関係から他人の所有に対する権利が創り出される。金持ちと貧乏人が生まれる。そこから争いが起こり、最後には、強者と金持ちにとって都合のよい戦争状態になる。これらの人々が諸々の関係から利益を得るからであ

る。この戦争状態はしかしまたそれらの関係にとっても所有者達にとっても不利益になる。不利益を避けるために人々は社会契約を成立させる。しかしこの契約は結果として弱者の不利益に繋がる。契約は、良い意味で行使されない場合は、解除できなければならないだろう。

社会契約と所有の有害な役割についてのこの思想は

S. 643

封建的相続契約の例に対するクライストの詩的関心事となって結晶している。事件が定住させられる時と場所は、それ故に彼にとってはどうでもよい。クライストにとっては具体的な歴史的イベントが問題なのではない。最初はストーリーはスペインで進行するが、しかし最終草稿では根本的な変更なしに中世のシュヴァーベンへ移される。

相続契約によるそのような有害な争いの根拠付けは決して単なる構想ではない。争いはまた中世の騎士制度に限定されていない。このテーマ選択の時事関係は、フリードリヒ2世がシュレーゲンを併合した時、ある相続契約を引き合いに出したこと、そして18世紀の戦争惨禍と普墺間の尚もうち続く不和が、見かけは相続契約に由来していることにあった。クライストが直接それに刺激されて、相続契約をそのような破滅的な相互の怒りの起点にしたわけではない。いずれにせよその証拠はない。しかしここで

「特殊なクライスト問題が、何らかの人的・社会的背景なしに、問題の現実的基盤を形成する試みなしに、完全にあからさまに出現している¹⁶⁾」――

というルカーチのこの主張は是非とも修正される必要がある。恐らく社会的関係は存在する、しかしそれは思想構成の道を経て提供されるのであって、実際の社会的現実の模倣においてではない、という風なのである。

『シュロップフェンシュタイン家』の問題性はそうしてもまだ論じ尽くせな

い。我々はしかし、クライストの創作にとってのルソーの意味を追求するという課題に限定した。それ故に我々はクライストの苦闘の次の対象に向かうことにしよう。これまでルソーが引用されることがなかった対象に、つまり『ローベルト・ギスカル、ノルマン人の将軍』にである。一般にこの題材におけるクライストの挫折は、古代と現代の悲劇の総合や、

S. 644

ヴィーラントが書いた通り、アイスキュロス、ソフォクレス、シェイクスピアの統合という形式領域での試みが彼の才能を上回ったことに理由があるとされたか、またはしかし、ギスカルが、社会的権力を意味する訳ではないペストと戦っているだけなので、真の敵をもたないということに理由があるとされたかである。最初の異本はその際、クライストが後に『こわれ甕』と『ペンテジレーア』においてこの形式上の課題設定の輝かしい解決に成功していることを見落としている。第2の異本は、それがペストによる脅迫だけに縮小され、構想を余りにも単純化している。これがその通りなら、『フェーブス』において後に新たに書かれた断片に、説明のために添加された両方の注釈をクライストはしないで済ませたであろう。最初の異本はこうである。

「イタリアのノルマン王国創立者ヴィルヘルム・フォン・デア・ノルマンディーには3人の弟がいた。王には子供がいないので、弟たちが次々に合法的に王位を継いだ。3番目の弟が死んだ時、その息子アーベラルトは、子供であったが、今や君主として公告されるべきであったろう。しかし4番目の弟ギスカルが、3番目の弟から後見人に指名されて——兄弟の後継順が彼に味方したからにせよ、国民が彼を非常に愛したからにせよ、王位を授けられた。そして、これを実現すべくとられた手段は忘れられた。——要するに、ギスカルは30年来王として、そして息子のローベルトは王位継承者として承認された。——これらの事情が少なくともここでは基礎になっている¹⁷⁾。」

この最後の添加は注目に値する。これによってクライスト自身が、歴史的
事実を自分の目的に役立つようになり自由に処理していると指摘している
のである。事実ローベルト・ギスカルは決してビザンツを攻囲したのではな
く、準備の際にペストで死んだのである。それ故二つ目の注も、歴史的
事件のための説明ではなくて、歴史的事実の自由な芸術的な置き換えのた
めの説明である。これをアーベラルトは、国民の代弁者として登場する老人に報告
している。

ギリシャの諸侯ネッソスとロクシアースは、
諸君も知るごとく、ある条件つきで
鍵を密かに彼に手渡す手筈をとうに決めている、
その条件を彼は、

S. 645

頑強に拒み続けてきたが
今日はそれを認めるという書状をもたせた使者を
彼らの下に送った。(366 f.)

これに対してクライストは注を与えている。

この点は（後に実証されるであろうが）コンスタンチノーブルの裏切り者
たちの要求であった。アレクシウス・コメネスによって追放されたギリシャ
の皇妃が、彼女の子供たちの名において皇位につくべきではなく、ギスカル
自身が皇位につくべきだというのである¹⁸⁾。

これらの注から、クライストにとって明らかに問題性だけが重要だった訳
では決していないことが、つまりギスカルがペストとの超人的な戦いの中で敗

れることが明らかになる。自分の有能を基礎に支配者の職を受け継ぎ、合法性という原則、王位に対する相続要求の原則と衝突する強奪者の問題性が重要である。それは起こりそうな問題である。ナポレオンがまだ自身皇帝に就いていなかった¹⁹⁾し、ハプスブルク家との結びつきによって他の王家と同等にすることを試みたにも拘わらずである。それは、クライストにとってルソーの思考過程と取り組むことから生じた問題性である。ルソーの思考過程は『社会契約論』において次のように述べられている。そこの一節一節をクライストが例えば彼のギスカル—素材にモデルとして載せた、という結論が引き出される必要はないが。

「国家がまあまあ大きい場合は王はたいいつねに小さすぎる。反対に、勿論滅多に起こることではないが、国家が指導者にとって小さすぎるというケースが起こる時には、国家の統治も悪くなる。

S. 646

王は常に大規模な計画を抱いているからであり、それ以上に国民の利益を忘れ、彼の才能の濫用によって国民を不幸にするからである。偏狭な指導者が才能が少なすぎるために国民を不幸にするどころではない²⁰⁾。」

まさにそれがギスカルのケースで確認されていることをクライストは見ている。クライストはルソーの共和主義的姿勢を引き継いではいないが、やはりギスカルの中に支配者を見ている。圧倒的な個性によって自分自身だけでなく全国民を危険に陥れる支配者を。ルソーはこういう時、唯一の支配者が支配する際の極めて手痛い弊害として後継者不足の連続を強調する。

「一人の王の死後には、別の王が現われなければならない。選挙までは危うい中間期が経過し、選挙戦は荒れる²¹⁾。」

相互買収の危険が強調され、ルソーの言うようにそのような状況を通して必然的に生じる道徳的危険が非難される。

「さてこのような弊害を防止するために何がなされたか？ 2, 3 の門閥における王位が世襲化された。そして王たちの死の際のいかなる争いをも防止する王位継承の順序が決められた。つまり、君主統治の弊害を選挙の陰謀の代わりとすることによって、賢明な支配よりも見かけの静けさを選び、そして、良き王たちの選挙のために争わなければならないことよりもむしろ、子供たち、人非人、虚弱者を支配者にする危険を冒そうとした²²⁾。」

【筆者注】

①：研究ノート

原著… Siegfried Streller: Heinrich von Kleist und Jean-Jacques Rousseau*
Wege der Forschung Band CXLVII (147)
Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt
Heinrich von Kleist Aufsätze und Essays
herausgegeben von Walter Müller-Seidel 1987
Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt

※ハインリヒ・フォン・クライストの死後 150 年を機にライプツィヒのカルル＝マルクス大学のドイツ文学史研究所で行われた講演の改訂草案。発行はジャン・ジャック・ルソー生誕 250 年を機に行なわれた。

②：原著のページ数を示す。以下これに従う。

【原著者注】

- 1) Wilhelmine von Zenge 宛, 1801 年 3 月 22 日。ハインリヒ・フォン・クライストの作品。Georg Minde-Pouet 及び Reinhold Steig と共同で Erich Schmidt によって出版。Georg Minde-Pouet による第 2 版。ライプツィヒ, 発行年欠如。1 巻, 222 頁 (以下: I, 222 とする)。
- 2) 同上, I, 222。
- 3) Wilhelmine von Zenge 宛, 1801 年 10 月 10 日。II, 64 頁以下。
- 4) ヴィーラントがゲオルク・クリスチャン・ヴェーデキントに宛てて, 1804 年 4 月 10 日。ハインリヒ・フォン・クライストの人生足跡。同時代人の記録と報告。

ヘルムート・ゼントナーの出版, プレーメン 1957年, 125番, 89頁。

- 5) オスカル・リッター・フォン・クシリンダー：ハインリヒ・フォン・クライストとジャン・ジャック・ルソー。ゲルマニスト研究, 193号, 1937年。
- 6) ルソーへの指摘はヴィルヘルム・ヘルツォークの場合に見られる：ハインリヒ・フォン・クライスト。ミュンヘン 1911；Josef Körner：権利と義務。クライストの『ミヒャエル・コールハース』と『ホンブルク公子』についての研究。Zs. f. Deutschkunde, 1926において；H. M. Wolff：政治詩人としてのハインリヒ・フォン・クライスト。Los Angeles 1947（カルフォルニア大学出版 現代言語学 27）。

Wolff はルソーの影響を彼の問題設定の下に他のここに挙げた人たちより詳しく調査している。しかし作品の中心問題に迫っているのは『シュロップフェンシュタイン家』と『ペンテジレア』の場合だけであり、彼の解釈に同意することはできない。彼はアマツォーネン国家の中に「啓蒙の理想国家」を見て、そして『ペンテジレア』の結末は、ペンテジレアの死が掟から動機付けられているに違いないだろうから、誤っている、と言っている。専攻論文「ハインリヒ・フォン・クライスト。彼の創作の歴史」, Bern, 1954 の中で、Wolff はルソーの影響を本質的にもっと少ないと見ている。Wolff は現在、ルソーがクライストを、彼の詩人としての本来の使命から転向させた、と言っている。Benno v. Wiese（レッシングからヘッベルまでのドイツ悲劇。ハンブルク 1955年）, H. A. Korf（ゲーテ時代の精神, Bd. IV, ライプツィヒ 1955）, Heinz Ide（若き精神, ヴェルツブルク）は、ルソー分析を、重要ではない、独特のクライスト的なものにとって表面的な衣装に過ぎない、と見做している。Friedrich Koch（ハインリヒ・フォン・クライスト。意識と現実。Stuttgart 1958）も、ルソーにほとんど重きを置かない。それに反して Hans Mayer（ハインリヒ・フォン・クライスト。歴史的瞬間。Pfullingen 1962）は強調してルソーの意味を際立たせる。勿論、彼がジャコバン党員に求める（「今やルソーを語る人は同時にロベスピエールのことを言っている」S. 24）結びつきは承服させることができない。クライストがいつかある時、ヘルダーリンのように、フランス革命と積極的な関係を持ったという指摘はない。

- 7) Georg Lukács：ハインリヒ・フォン・クライストの悲劇。19世紀のドイツリアリストたちの中で。Berlin 1951, S. 23
- 8) Hans Mayer はそれに反して言っている：「彼は〈Citoyen 市民〉を見つけるためにフランスへ移った、そしてブルジョワを見つけた。」（上述, S. 26）
- 9) 1801年8月16日。II, 52.
- 10) 他方、彼はそれをもって既に市民的位を越えている。「クライストの悲劇は、彼の思想と創造が市民世界を越えたがっていた点にあった——市民的な思想の成就において…こうして劇作家ハインリヒ・フォン・クライストは（彼のドラマの

形式においてでなく、ドラマの思想世界において) ドイツ古典主義よりもそして本来のロマン主義よりもますます Georg Büchner や Grabbe といった人になるかに近くに立っていることも明らかになる。」 Hans Mayer 上述, S. 56 f.

- 11) Karoline von Schlieben 宛, 1801年7月18日。II, 25.
- 12) Wilhelmine von Zenge 宛。1801年8月15日。II, 46.
- 13) Lukács, 上述, S. 28.
- 14) ハイน์リヒ・フォン・クライストの作品集。Georg Minde-Pouet 及び Reinhold Steig と共同で Erich Schmidt による出版。ライプツィヒ 発行年欠如。第4巻, S. 287 (以下: 4,287)
- 15) »Le premier qui, ayant enclos un terrain, s'avisa de dire ceci est à moi, et trouva des gens assez simples pour le croire, fut le vrai fondateur de la société civile.« Oeuvres de J.-J. Rousseau. Paris 1819, t. IV, p. 278.
- 16) Lukács, 上述, S. 28.
- 17) 1,180 f.
- 18) 1,184.
- 19) Ernst Fischer はあまりに大胆にナポレオンとのこの関係を主張する, そしてその際, 戴冠を2年だけ前に移している。Ernst Fischer: ハイน์リヒ・フォン・クライスト。Sinn und Form, 1961年第13巻5号, 6号, S. 786, 788. において。Fischer はクライストにとってのルソーの意味を当然だと評価する。H. M. Wolff は, ハイน์リヒ・フォン・クライスト, S. 140 ff. において, Guiskard (ギスカル) の中にナポレオンを見ている。J. Maaß (クライスト — プロイセンの松明。伝記。Desch 1957) は S.70 で, Akka を前にしてベストで挫折したナポレオンのエジプト出兵を指摘している。Guiskard (ギスカル) はしかしナポレオンと解釈されることはできない; 何故ならナポレオンに対するクライストの関係は常に否定的であったから。
- 20) Jean-Jacques Rousseau: 社会契約説, Werner Bahner 出版。ライプツィヒ 1958, S. 83. «Pour peu qu'un état soit grand, le prince est presque toujours trop petit. Quand, au contraire, il arrive que l'état est trop petit pour son chef, ce qui est très rare, il est encore mal gouverné, parce que le chef, suivant toujours le grandeur de ses vues, oublie les intérêts des peuples, et ne les rend pas moins malheureux par l'abus des talents qu'il a de trop, qu'un chef borné par le défaut de ceux qui lui manquent.» (ルソー, Oeuvres, t. V, p. 205)
- 21) 同上。«Un roi mort, il en faut un autre; les élections laissent des intervalles dangereux; elles sont orageuses; ...» (上述, p. 206)
- 22) 同上。«Qu'a-t-on fait pour prévenir ces maux? On a rendu les couronnes héréditaires dans certaines familles; et l'on et l'on a établi un ordre de

succession qui prévient toute dispute à la mort des rois; c'est-à dire que, substituant l'inconvénient des régences à celui des élections, on a préféré une apparente tranquillité à une administration sage, et qu'on a mieux aimé risquer d'avoir pour chefs des enfans, des monstres, des imbécilles, que d'avoir à disputer sur les choix de bons rois.》(ルソー, Oeuvres, t. V, p. 206)

※拙稿の執筆にあたっては、「クライスト — その生涯と作品」 福迫佑治著 1978 三修社 と「クライスト研究」浜中英田著 1970 筑摩書房を一部活用させていただいた。

(よこや・ふみたか 政治経済学部教授)